

月刊 ポケットあわじ

国生みの島 あわじの 昔ばなし

VOL.20

発行日 2004年1月1日

(発行) 淡路生活創造応援隊

県立淡路文化会館

県立淡路生活科学センター

〒656-1521 津名郡一宮町多賀600

TEL0799-85-1391

FAX0799-85-0400

あけましておめでとうございます。本年も「ポケットあわじ」
をご愛読くださいますようお願い申し上げます。



国生みの島と呼ばれる淡路島ではたくさんの昔ばなしが語り継がれています。
今回は淡路島の各地の昔ばなしを集めました。お楽しみください。

洲本市、淡路町、津名町、西淡町、三原町の昔ばなしは「淡路伝説かるた」、
北淡町のお話は「北淡いろはかるた」より、五色町の昔話は「五色いろはがるた」、
緑町の昔話は「緑町風土記」より紹介します。

ご指導いただいた濱岡きみ子氏をはじめご協力いただいた方々に感謝いたします。

あわじの昔話 ～ 淡路各地の昔話をかるたや本から紹介します～

「朝風に櫂の音きく野島崎」



むかしは北淡の海の玄関は野島が崎だった。野島が崎の海人族(漁夫、魚人)が、海草や魚をとって難波の大和族におさめ、強い結びつきをもっていた。また、野島が崎は天然の良港で難波を船で出発した天皇や貴族が神戸沖、明石をすぎた頃に休憩する場所であり、瀬戸内を西征する船や狩りに来る船なども野島が崎で停泊した。柿本人麻呂や山部赤人も野島に来て多くの歌をつくった。(北淡町野島)

「河上のイブキが息を吹きかえす」

鮎原河上神社に菅原道真が植えたといえらるイブキがある。千年余りの歳月を経ているというだけに、みごとな幹をしている。ある年の火事でイブキが焼け、このまま枯れるかと思われたが、芽を出し今のように茂った。またある年、拝殿の屋根替えをするのに屋根にかぶさっていたイブキを切ろうと相談、用意をすると一晩のうちにイブキが起き上がったといわれる。(五色町鮎原)



“蛇まつり”の由来

むかし、村で農作物を荒らし、百姓達を困らせた大蛇が射殺された。そのたたりか村では農作物ができず困った。そこで、わらで大きな蛇を作り、千本塔婆を立てて供養したところ、豊作続きで、村名も安住寺と改め、毎年正月11日()には大蛇が田畑を廻って豊作を祈るこの祭りが催されるようになった。

(緑町倭文)

P.8をご覧ください。

「生月や先陣争い宇治川で」



「小局塚通盛したう七つ塚」

宮中第一の美人といわれた小宰相の局は、平通盛とロマンスの末、結婚した。一の谷の戦いで平家が負け、通盛は戦死した。屋島へ逃げていた小宰相の局は、悲しみのあまり鳴門で入水した。阿那賀丸山にうちあがった局と六人の家来をここであつくほうむり、今におまつりしている。(西淡町伊加利)

源頼朝と木曾義仲が京都の宇治川で戦ったとき佐々木四郎高綱が、頼朝からいただいた生月の名馬にまたがり、川向の軍めがけて進んだ。この梶原源太景季との先陣争いで力を得義経を倒すことができた。生月は淡路町開鏡産と言われている。(淡路町岩屋)



「徹夜して二千の並松八木に植え」



村の庄屋徳助が、仕事で失敗してしまった。江戸時代にはその内容によって打ち首ごくもんということになる。日ごろ村のために働いてきたので、村人は徳助を助けたいと役人に願い出た。一夜のうちに二千本の松を植えると助かると聞き、村中総出で植えた。松は育ってみごとな並松となり、八木の並松と呼ばれた。(三原町八木)

村の庄屋徳助が、仕事で失敗してしまった。江戸時代にはその内容によって打ち首ごくもんということになる。日ごろ村のために働いてきたので、村人は徳助を助けたいと役人に

「ろけんしてはりつけにあう孫太郎」

孫太郎は庄屋であったが、生活に困った。尾崎村に女のちょんぼ(堂守り)がいた。ここで米を借りたが返せないで、ある時殿様の米倉に穴をあけ米を盗み出した。そして、盗ったのはこのちょんぼだといったが、調べると犯人は孫太郎であることがわかり、はりつけにされた。「安乎孫太郎気の誤りよ、尾崎のちょんぼ心から」という歌が残っている。(洲本市安乎)





東浦町老人クラブ連合会ではこれまでに2冊の昔話の本を出しています。いろいろな昔話のほかに、「昔うた」なども紹介されています。

釜口で口ずさまれた子守歌
 ねんねんころり ねんころり
 ねんねのお守りはどこへいた
 あ山越えて 里にいた
 里のおみやに何もちた
 でんでん太鼓に 笙のふえ
 みかんこおりにたちばな
 ねんねしなされ おやすみなされ
 ねんねした子にや
 赤いべべ着しよ
 ねんねせぬ子にや
 縞のべべ
 ねんねんころいち 天満の市よ
 大根揃えて 舟に積む
 舟に積んだら どこまで行きやる
 木津や 難波の 橋の下
 橋の下には カモメがいやる
 カモメ捕りたや つなほしや

「義経をしのびてくらす静御前」

鎌倉時代に、義経は兄の頼朝に追われ、奥州衣川で自決してしまった。その死を知って悲しみに沈む静御前を頼朝の妹が自分の荘園志筑の里へ住まわせた。静御前は美人で踊りも上手で何でもできた。今も津名町に、義経と共に古い碑が二基まつられている。（津名町田井）



～ 民話の主人公「田尻の源サ」ゆかりの地を訪ねて～

「むかしばなし南淡」の中にも田尻の源サの話があります。以前私の近所に源サのお孫さんが住んでおられたので、よくその話を聞かせてもらいました。

最近田尻の方へ家を建てて住んでおられるので、久しぶりにお宅を訪問しました。

南淡町の福良から阿万へ向かう途中、大見山の頂上附近から田尻へ降りて行くと、昔、源サの家が建っていたところに着きます。

早速源サの（本名は阿部源三郎なので、源三が正しい）のお孫さんの阿部幸子さん（78歳）の案内で、昔の家の基礎ののべ石や柱石を見せていただきました。

力も強かったが、何かにつけ大きなものが好きだったようで、玄関のところの基礎の土台石は大人でもまたげないほど大きかったです。源サが作った石どうろうも庭に保存されており、上にのせた石は200貫（約750kg）もあるそうです。のべ石や柱石は今も花壇や庭の飾りに使われています。

その大きさに圧倒されてしまいましたが、お孫さんは続けて、日常生活のエピソードや民話にまつわるウラ話などを語ってくれました。阿万の八幡さんの境内にある忠魂碑についての民話では「1,300kgもある石碑をどうして上げたらよいかみんな途方にくらっていました。ところが翌朝になると、石碑が土台の上にのっているではございませんか。」となっています。お孫さんの話では、巨大な石を運ぶ時も、ひぞこ（干潮）に海の中に入り、ワイヤーで船に縛り付け、満潮になって石が上がった時に手こぎの船で運び、陸上では丈夫な木のころを使って西村（西町）の浜から八幡さんまで運び、石を上げるのも人の知らない間に上げたということです。

このように、源サはいつも人一倍の努力と工夫、力と技を発揮して、みんなを驚かせたそうです。一口で言えば、「源サは気は優しくて力持ち」だったようです。

取材に行った私たちは「気はやさしくて工夫好き」の源サのお孫さんとひ孫さんと時のたつのを忘れて話しあいました。（坂本和子）



源さんが運んだ石とお孫さん

*「むかしばなし南淡」のURL→<http://www.town.nandan.hyogo.jp/library/mukasi/mukasi05.htm>

聞いたことある? 昔からの言い伝え

～ 応援隊が集めた言い伝えをクイズ形式で紹介します。～

- 夜中に笛を吹くと、どうなるでしょう?・・・A. たぬきが来る
B. へびが来る。
C. 近所から苦情が来る。
- 火遊びをすると・・・A. やけどする。
B. 消防車が来る。
C. おねしょする。
- 1番最初に雨が当たると・・・A. いいことがある。
B. 悪いことがある。
C. 親不孝である。
- 指がさかむけになると・・・A. 栄養不足である
B. うそつきである。
C. 親不孝である。

さて、何問答えられましたか?

淡路だけの言い伝えばかりではありませんが、地域によって少しずつ違うようで、おもしろいですね。
(答え)

言い伝えではAとBがあります。Cもありえますね。

Cです。A、Bにも気をつけましょう。

・ ともに、Cの答えが言い伝えられています。

みなさんの知っている言い伝えと同じだったでしょうか?

おせちに飽きたら・・・

お正月にはおせち料理を楽しまれた方も多いことでしょう。おせち料理の残り物や作り置きのできる材料を使った簡単バラ寿司を紹介します。

簡単バラ寿司レシピ～

- 1 お正月に飾ったダイダイを絞りピンに入れ保存する。
お酢に混ぜると味もまろやかになる。
- 2 米 2 升に対して、
塩 120グラム、砂糖 350グラム、酢 500cc
うまみ調味料 小匙3、みりん 適量を
弱火で 溶けるまで混ぜる。
たくさん作りピンに入れて保存することもできます。
- 3 おせちなどの煮物の残り物を小さく切って混ぜたり、
上に飾ったりして、バラ寿司にする。
錦糸卵が面倒な場合は、いり卵で飾る。

*お酢の配合はイロイロありますが、我が家ではこうしています。

* レシピは米2升の分量ですが、そのご家庭に合った量(薄いのがよければ
少なく入れるなどして)にすればよいと思います。